九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語表現史研究

森脇, 茂秀

https://hdl.handle.net/2324/1500466

出版情報：Kyushu University, 2014, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（様式６－２）

氏　　名	森 脇　茂 秀
論　文　名	日本語表現史研究
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　高山　倫明 副　査　　九州大学　　准教授　青木　博史 副　査　　九州大学　　准教授　川平　敏文 副　査　　九州大学　　教授　　久保　智之

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

上記の論文は、助辞（助詞・助動詞）や動詞等の分析を通して日本語表現の構造を明らかにし、その史的変遷を動的に捉えようとしたものである。

第一章は接続表現の史的研究で、複合助辞「とて」の成立を日本語の引用形式との関連から探った第一節、「(已然形）ばとて（も)」の伸張を現代方言の分布を踏まえつつ考察した第二節、「さりとて」「さりとも」の衰退を「接続詞的用法から副詞的用法へ」という観点から論じた第三節、否定の助辞「ばや」の成立を、接続助詞「ば」が「とて」と複合助辞化して逆接用法化したプロセスと並行的に捉え、その語構成を「ば（接続助詞）＋や（間投助詞)」と結論付けた第四節から成る。

第二章は助辞による「希望表現」に関する論考で、「もが」形と「てしか」形の相互交渉を丹念に跡づけた第一節、承接する動詞や引用節との関係から、希望対象の内容を表示する「ばや」の機能を考察した第二節、「かし」が「詠嘆的」から「主体的」希望へと変容した点を、対象を限定する副詞句との関係から考察した第三節、副詞句と呼応し「主体的希望表現」形式を担った「がな」の衰退を、「不定語＋がな」が副詞句化するプロセスとの関連から論じた第四節から成る。

第三章は「比況表現」に関する論考で、「似る」や「に似たり」形の基本的性格を分析した第一節、「Ａ、Ｂに似る＋否定辞」構造におけるＡやＢの特性を論じた第二節、現代方言とのつながりや役割語の概念も踏まえつつ「ごとし」を分析した第三節、「やうなり」の基本的性格を論じた第四節、「やうなり」の「祈願・目的用法」の出現を「べし」の衰退に絡めて考察した第五節、「しく」の意味用法の史的変化を共起する語句から分析した第六節、引用節を導く「いふやう」を、現代語「～ように（言う／祈る)」の用法との共通性から分析した第七節から成る。

第四章は、前章までの考察に関連のある語句の語史と現代方言の状況をまとめたもので、全体の補足に該当する。「すぐる」の語史を論じた第一節、「かしかまし」「みみかしまし」の用法差を論じた第二節、「よも」の平安前期から後期にかけての質的変容を指摘した第三節、近世後期の方言書『筑紫方言』(九州大学蔵）を翻刻した第四節、長崎県島嶼部五島方言の指定辞等の分布を報告した第五節、同方言の「詠嘆表現」と「ゴタル」の用法に関する調査報告を付した第六節・第七節から成る。

文学作品中の用例を博捜し，個々の用例に基づいて各表現形式の意味・用法を丁寧に記述するという、徹底した帰納主義を貫いた考察には見るべき点が多く、今後の進展も大いに期待されるところである。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。